

日本におけるデカルト哲学の受容 1836-1950

山田 弘明

はじめに

日本とデカルト哲学との関わりは歴史的にどこまで遡ることができるであろうか。日本人が西洋哲学に最初に接したのは、おそらく16世紀コレジヨと呼ばれるイエズス会の学校においてであったであろう。それは大分、天草、長崎などにあり、そこでは聖職者養成の一環としてアリストテレス＝スコラの学問が教えられた。教科書の一つであるペドロ・ゴメス編『講義要綱』⁽¹⁾がその内容を示している。しかし17世紀はじめにはそれらは廃校になり、デカルト哲学が教えられたということはない。その頃の日本は鎖国に傾きつつあった。『方法序説』の出した1637年に島原の乱があり、『省察』出版の1641年には平戸のオランダ商館が長崎の出島に移され、文字通り鎖国政策が取られた。平戸には図書として、アウグスティヌスの『神の国』や F.ベーコンの『隨筆集』があったことが知られている⁽²⁾。デカルトの新刊書が持ち込まれたとしても不思議ではないが、それが日本の知識人の耳に達したとは考えにくい。18世紀の新井白石『西洋記聞』(1715)にもデカルトの名はない。

だが19世紀、江戸末期の日本でデカルトに触れた文献が少なくとも二つ存在する。第一は高野長英『聞見漫録』(1836 天保7)である。長英は蘭方医として多くの医学書や理化学書を訳述したことで知られるが、そのなかに「西洋學術之部」⁽³⁾と称する文書がある。タレスからニュートンまでの自然哲学史をスケッチするなかで、デカルトについて次のように記している。

「レネ テル カルテス」トイフモノ起コリテ、「コーペルニキユス」ノ説ヲ崇ビ、其説ヲ裨益シタリ。但シ、旧染ノ存スル所、免ルハコトヲ得ズシテ、其論、真偽相半バスト雖モ、世人千古ノ學風ヲ棄テハ、実學ノ真理ニ入ルハ、

此人ノカナリ。著書頗ル多シ。諸學科ニ涉ルト雖モ、就中、數學・究理學ハ殊ニ勤メタリ。其天學ヲ論ズルノ条ニ、天ニ真ノ空ナシ。恒星ハ太陽ニシテ、各其游星ヲ存ス。然レドモ、其間ノ一箇流体アリテ、此運動ニ從テ、運天ヲナスト云ヘリ。是レ未ダ旧圈ヲ脱セザルノ所ナリ。(『日本思想大系 55 渡辺崋山、高野長英、佐久間象山、横井小楠、橋本佐内』岩波書店 1971.p.208)

「レネ テル カルテス」とはルネ・デカルトのことである。これは当時のオランダの科学書（不詳）を元に長英がまとめたものと考えられている。科学史の一コマとしてデカルトを短く紹介したものにすぎないが、これが日本の文献に最初に登場するデカルトである。

第二の文献は福沢諭吉の『西洋事情』（1866 慶応 2）である。その「文學技術」の章には次のようにある。

此時に當テフランシスコ・バーコン、デス・カルテス等の賢哲世に出て、専ら試験の物理論を唱へて古來の空談を排し、千六百六年には伊太利の學者ガリレオ、初て地動の説を建て、千六百十六年には英國の醫師ハルフキー、人身體血液運行の理を發明する等、世の學風漸く實際に赴く。(『福沢諭吉全集』第 1 卷、岩波書店 1958.p.302)

という短い記述がある。バーコンとはベーコン、デス・カルテスとはデカルトのことである。これは英書（不詳）にもとづく科学技術史の略述である。これら二つの文献は、いずれもデカルトを古來の風を破る近代の実学的な学問の始祖の一人として紹介している。手探り状態の中での単なる言及にすぎないが、長英や諭吉にとってデカルトはベーコンとともに西洋近代の学問を切開した人として触れるに値すると考えられたのであろう。

デカルトの名が本格的に登場するのは、明治になってからのことである。最も初期の言及は西周「生性發蘊」（1873 明治 6）に見いだされる。

而彼レノ紀元千五百年代ニ至リ、英ノ馬孔、法ノ埜加爾多カ出テ、新哲學ノ興リシヨリハ、性理ノ論モ、精微ヲ極メタリ、中ニモ、埜加爾多カ疑ヒヲ以テ入學ノ門トシ、萬象皆疑フヘクシテ、一ツモ實ナリトシテ、取ルヘキ物ナシト雖モ、其之ヲ疑フノ主ナル、自己ノ獨知ニ至テハ、自ラ其眞ニ存スルヲ

知テ、一ツモ疑ヒヲ容ル可ラスト、此自己ニ存スル獨知ヲ主トシテ、説ヲ立シヨリ...。(大久保利謙編『西周全集』1. 宗高書房 1960.P.32)

この記述は G.H.Lewes, *The Biographical History of Philosophy*.1857 によるものとされている。ルイスの書は、古代から 19 世紀までの浩瀚な西洋哲学史であり、明治初期の日本で珍重されたようである。西はこれによって西洋哲学史を概観するなかで、デカルトのコギトにはじめて触れている。だが原書のデカルトの章 (pp.366-383) とは必ずしも一致せず、エッセンスを一部要約したものと思われる。

明治の後期において、デカルトは夏目漱石の『吾輩は猫である』(1906 明治 39) でも言及され、

デカルトは「余は思考す、故に余は存在す」といふ三つ子にでも分る様な眞理を考へ出すのに十何年か懸つたさうだ (岩波版『漱石全集』1956.第 2 巻 p.23)

と批判的に語られる。漱石がコギト・エルゴ・スムの眞意をどこまで理解していたかは疑問であるが、それが小説にまで取り上げられるほどにポピュラーであったことが分かる。漱石は東京大学での講義をまとめた『文學評論』(明治 38-40 講義、明治 42 出版) でも、「十八世紀における英国の哲學」と題して、ジョン・ロックを論じるなかでデカルトの生得觀念説を取り上げている。

デカルトはオーソリチーを棄て、理性に従はねばならぬと唱へた人である。…デカルトは一方に於て吾人は吾人の心中に於て天賦觀念^{innate ideas}があり得ると云ふ事を假定した。吾人が若し物があるが儘に知り得るならば——経験と獨立して眞理を認むることが出来るならば——其智識は誰にも同じでなければならぬと斷じた。此論法を引つくり返せばかうなる。各人に同じき者は経験と獨立した者である。例へば數學の第一原理の如きは普遍で絶對な眞理で、全く経験から獨立した者である。だから哲學者も數學者の様に自分の取扱ふ問題に就て公理とも云ひ得べき争ふべからざる者を發見して、夫れから出立したならば、數學程に精密な學問が出来るだろう。——是れがデカルトの考である。そこでデカルトは色々な推理の末、三つの實在を得た。即ち、神、心、

物である。(岩波版『漱石全集』1957.第19巻 pp.55-56)

これはかなり専門的な内容となっており、何らかの英書に基づく分析と思われる。漱石の関心はイギリスの哲学にあったが、デカルト哲学についてもある程度の心得があった人だということが分かる。明治も30年代の後半になると、かなりはっきりしたデカルト像が出来つつあることが読み取れる。

本稿では幕末から昭和戦後にかけてのデカルト哲学への関心と研究状況を、

1. 日本におけるデカルト書誌 1836-1950
2. 主たるデカルト研究 (桑木徹翼、朝永三十郎、野田又夫)
3. 総括

という順序で見てゆくこととする。1. と2. においてデカルト哲学の受容の具体相が明らかになり、3. において受容の特徴と背景およびその影響が分析されるであろう。

1 日本におけるデカルト書誌 1836-1950⁽⁴⁾

ここでは日本においてデカルトに触れた書誌や研究を年代順に挙げ、その内容紹介とコメントを付すことにする。とくに明治期のものについて詳しく調べたつもりであるが、すべての文献を網羅しているわけではなく、主要なものだけに限られる。種別としては、短い言及や紹介、翻訳、訳述、概説、研究がある。重要と思われるものは太字と*で示した。

1836 天保7 高野長英『聞見漫録』 (既述)

1866 慶応2 福沢諭吉『西洋事情』 (既述)

1873 明治6 西 周「生性發蘊」 (既述)

1877 明治10 西 周「学問ハ淵源ヲ深クスルニ在ルノ論」『学芸志林』

「仏ニデカルト出ル前ニ英ニペーコン起リ...」(松本三之介・山室信一

編「学問と知識人」『日本近代思想大系』10、岩波書店1988.p.31)

1879 明治12 吉田五十穂『西哲小傳』

「デカルト（レネー）ハ佛國ノ有名ナル理學者ニシテ且數學家ナリ、千五百九十六年ツورانニ生ル、光線曲折ノ理ヲ發明ス、其理學説ハ是ニ似タルヲ以テ一時ハ大ニ行ハレタリト雖モベーコン及ビニュトン派ノ理學説、世ニ出デルニ及ンデ複々之ヲ説ク者ナシ瑞典ノ女王クリスチナノ聘ニ應シテ土篤恒ニ赴キ、千六百五十年同府ニ死ス」。これは西洋哲學者の人名小辞典である。チャムブル（Robert Chambers, *Encyclopedia*）、ビートン、アップレトンの人名字書からの抄訳という。

1883 明治 16 高田早苗「実物学派ノ問ニ答フ」『明治協会雑誌』

「17世紀ニ至リベエコン、デカール相並ンデ起リ...。」(同上、『日本近代思想大系』10、p.269)

—— 井上哲次郎⁽⁵⁾『倫理新説』

「昔シデカルト氏總テノ自己ノ意識ニ質シテ明瞭ナル者ハ眞理ナリト思惟セリ...。」(『井上哲次郎集』第一卷クレス出版 2003.p.5)

—— 井上哲次郎・有賀長雄『西洋哲學講義』

「獨逸ノカント、フヒヒテ、セリング、ヘーゲル等ノ諸氏ハ皆デカルト氏ノ學風ヲ傳フ即ち形而上學派ノ人ナリ」(卷之一 p.3)。本の全体は詳細な古代中世哲学史をなしている。近代の部分はない。シュヴェーグラー、ルイス、ユーベルヴェーグなどに依拠することであるが、本邦初の西洋哲学史であろう。

1884 明治 17 V.クザン『近代哲學宗統史』(竹腰与三郎訳)

V.Cousin, *Cours de l'histoire de la philosophie moderne*.1841-46⁽⁶⁾の概要を記した英訳書 1869 に基づくもの。デカルトを近代哲学を興した人としてとらえ、懐疑、数学的方法などの点でソクラテスにもまさる (pp.45-48) とする。なお、仏語原本の第三講義 (1828.4.29) はデカルト研究に捧げられている。クザンはデカルト全集 *Oeuvres complètes de Descartes*.11 vols.Paris.1824 を編集した堂々たる哲学史家である。

—— F.ボーエン『近世哲學』(有賀長雄訳) *

F.Bowen, *Modern Philosophy from Descartes to Schopenhauer and Hartmann*.1877 の訳。ボーエンは米國ハーヴァード大学の哲学教授でフェノロサの師であった。構成からするとカントとドイツ観念論に重きが置かれている。第一章は17世紀の哲学の概説である。第二章「でかるとの哲學」は56ページに及ぶ。われの存在、観念、神などの議論を丁寧に追い、最後に批判として、われの存在と思想とを同一視しているの

は無理があるとする。第三章「本然観念の説」では、生得観念や神の観念の生得性の是非が、ロックなどを援用して論じられる。英書の翻訳による最初の本格的なデカルト哲学の紹介である。

1886 明治 19 中江兆民『理學沿革史』*

A.Fouillée, *L'histoire de la Philosophie*. 1875. pp.238-271 の訳。古代から19世紀までの一般的な哲学通史である。デカルトの学説が70ページ余にわたって詳しく紹介されている(『中江兆民全集』岩波書店 1986.第5巻 pp.193-268)。その学説は有形実物、無形精神、意欲道学の三大部にわかれるが、三者の関係がはっきりしないと批判する。この時期の最も詳しい翻訳文献の一つである。なおフイエには、これとは別にデカルトに関する著作 *Descartes*. 1893 がある。

—— 中江兆民『理學鉤玄』

精神論、意象説、神物一体説などの説明において、7箇所にわたってデカルトを援用。

—— 井上円了『哲學要領』(前編)

「デカルト氏学説」として2ページでデカルトを略述。「天神は物心二者を造出しかつその契合を媒介するものとす。これ氏の哲学の一大欠点なり」(東洋大学編『井上円了選集』1987.第1巻 p.135)とする。

1888 明治 21-22 西田幾多郎「山本良吉宛書簡」

「宇宙ハアライハ神ハ、何故ニ始ナク終ナキカ。…實ニデカルトヲ氣取ルデハナイガ宇宙間解スベキ者一物カアルヤ。」(『西田幾多郎全集』岩波書店 1966.第18巻 p.5)

1889 明治 22 三宅雄二郎(雪嶺)『哲學涓滴』

デカルトからヘーゲルまでを扱う。シュヴェーグラーやクーノー・フィッシャーに拠る。17ページからなる「デカルトの學説」の章によれば、デカルトを近世哲学の元祖とする理由は、(今風に言えば)懐疑、コギト、二元論的世界観にある(pp.95-96)とする。原本の F. Schwegler, *Die Geschichte der Philosophie im Umriss*. 1847 は、二元論を克服するのにデウス・エクス・マキナを以てするなどの欠陥がある(岩波文庫『西洋哲学史』下巻 pp.24-25)としているが、三宅はこれには触れていない。

1890 明治 23 清沢満之「西洋哲学史講義」

真宗大学寮における明治 23-26 の講義。「デカルト氏」は10ページ。シュヴェーグラーなどに拠る。「批評」として、本体(=実体)は第一であ

るべきだから、心身という第二本体の説に自家撞着があり、また心物互働の問題は解決を得ていない（『清沢満之全集』岩波書店 2003、第5巻 p.158）とする。

1894 明治 27 田中泰麻呂訳編『西洋近世哲學者略傳』

哲学館の講義録。何らかの洋書によるベーコンからヴォルテールまでの訳述。「デカルト」の項目は4ページあるが、文字通りのデカルト略伝にすぎない。

—— 松本文三郎『近世哲學史』

同じく哲学館の講義録である。ルネサンスからショーペンハウエルまでを論じる。「デカート」は9ページあり、方法、純正哲学、宇宙哲学、倫理学を概観する。元になった解釈書は不明だが、よくまとまっている。

1897 明治 30 大西祝^{じゆ}「西洋哲學史」

早稲田大学での明治 29-30 の講義。1903 明治 36 の項を見よ。

1898 明治 31 中島力造『列伝体西洋哲學小史』*

小史と銘打つが、古代から現代（ハルトマン、ヴント）までの広範な哲学史（上下二巻）である。30種に上る哲学史家の解釈を参照しながらも、みずから原書を精読し独立の解釈を施したと著者は言う。「デカルト」（pp.182-204）は17世紀の仏国哲學者のうちで「二元論派」に分類されている。当時としては珍しいデカルトの写真入りである。学説として、懐疑、自我の存在、上帝（神）、物質的世界、情念、倫理を論じ、最後にデカルトが信神論者（汎神論）、自由論者であることに注意している。

1900 明治 33 加藤玄智『問答體哲學小史』

ソクラテスからヘルムホルツまでの思想の概略を問答体で述べる。データーなる人の *Cathechismus der Geschichte der Philosophie* に拠るといふ。問90「デカルトの哲學綱領如何」への答えとして3ページを費やしている。

1901 明治 34 波多野精一『西洋哲學史要』*

デカルトの記述は8ページ。K.フィッシャーや中島力造 1899 などを参考とし、簡にして要を得た論述となっている。結論として、精神身体間の相互作用と二元論とは矛盾する（『波多野精一全集』岩波書店 1968、第1巻 p.208）とする。

—— 中江兆民『一年有半』、『続、一年有半』

「カントやデカルトや実に独仏の誇なり、二国床の間の懸物なり」としな

がらも、デカルトらが精神不滅や唯一神を論じているのは「笑止千万」であり、唯一神説を主張しているのは「推理を本とする哲學者ではなくて、妄信を基とする僧人なるべし」と、東洋人の目で批判している。(岩波文庫版 pp.31,114,129-130)

—— K. フィッシャー・加藤玄智訳『哲學史要』

K.Fischer, *Geschichte der neuern Philosophie*.1897 の「序論」第二章以下の抄訳。本訳書ではデカルトをカント以前の形而上学として控えめに扱っている (p.291)。フィッシャーの書はエルドマン⁶⁾と共に哲学史の鏡とも言うべき定評のあるものである。その第一巻 *Descartes' Leben, Werke und Lehre* は浩瀚にして緻密なデカルト研究になっている。

1902 明治 35 W.ヴィンデルバンド・桑木厳翼訳『哲學史要』

W.Windelband, *Geschichte der Philosophie*.1878-80 の抄訳。これは概念および問題史をこととするもので、デカルトに関しては方法、本体、因果性を分析している (pp.328-363)。

1903 明治 36 大西祝¹¹⁾『西洋哲學史』下巻 警醒社書房*

先述した早稲田での講義をまとめたもの。「デカルト」は 36 ページを占め、精神、神、物体、心身などがバランスよく論じられている。デカルト哲学の不備として、中世的實在論を残す、循環論証、正当な本体（実体）は神のみであり第二義的本体はありえない、心身の相関が十分説明されない、などが指摘される⁶⁾。エルドマン J.E.Erdmann, *Grundriss der Geschichte der Philosophie*.1865 に拠るが、エルドマンを批判している場面もある。

1904 明治 37 桑木厳翼『デカルト』富山房* (後述)

1906 明治 39 夏目漱石『吾輩は猫である』(既述)

1909 明治 42 夏目漱石『文學評論』(既述)

1911 明治 44 西田幾多郎『善の研究』

「哲學が傳來の假定を脱し、新に確固たる基礎を求むる時には、いつでもかかる直接の知識に還ってくる。近世哲學の始に於て…デカートが「余は考ふ故に余在り」 cogito ergo sum の命題を本として、之と同じく明瞭なるものを真理としたもの之に由るのである。併し…デカートが余は考ふ故に余在りといふのは已に直接經驗の事實ではなく、已に余ありといふことを推理して居る。又明瞭なる思惟が物の本體を知りうるとなすのは獨断で

ある。…余が此處に直接の知識といふのは凡て此等の獨斷を去り、唯直覺的事實として承認するまでである(勿論ヘーゲルを始め諸の哲學史家のいつて居る様に、デカートの「余は考ふ故に余在り」は推理ではなく、實在と思惟との合一せる直覺的確實をいひ現はしたものとすれば、余の出立點と同一になる。)(『西田幾多郎全集』第1巻 p.49-50)

- 1919 大正 8 出 隆『デカルト 方法・省察・原理』大村書店*
432 +12 ページから成る。アダン・タヌリ版のラテン語・仏語からの本邦初訳である。本文には処々に原文が入り、適切な訳注もある。巻末の索引に用例が付されており、古典学者らしい緻密な構成となっている。
- 1925 大正 14 朝永三十郎『デカート』岩波書店* (後述)
- 1927 昭和 2 村松正俊『方法通説』世界大思想全集 7.春秋社
『方法序説』の訳。桑木 1937 に紹介されている。
- 1928 昭和 3 三宅 茂『感情論』世界大思想全集 1.春秋社
『情念論』の本邦初訳。桑木 1937 に紹介されている。
- 1929 昭和 4 河野与一「デカルト」『岩波講座 世界思潮』第四冊 岩波書店
- 1936 昭和 11 野田又夫「デカルトの形而上学」『哲學研究』第 21 卷-1,2
— 朝永三十郎『デカルト・省察録』岩波書店*
全 205 ページ。『省察』の内容を順を追って緻密に分析し、かつ適切な解釈を施している。日本のデカルト研究の一つの到達点を示すものである。桑木 1937 は、「デカルトの學説の論理的發展を追う。ドイツの史家の影響あり」と紹介している。
- J.マリテン『近代思想の先驅者』岩下壮一訳、同文館
J.Maritain, *Trois réformateur: Luther, Descartes, Rousseau*. 1925 の訳。カトリックの立場から、デカルトは天使を受肉させたとして批判する。
- 1937 昭和 12 桑木巖翼「日本におけるデカルト研究の現状」
原文は仏文 *L'état actuel des études cartésiennes au Japon*, in *Travaux du IX^e Congrès International de Philosophie*. III. Paris 1937. pp.134-139.
パリでの国際哲学会の報告である。桑木 1904、出 1916、朝永 1925、村松 1927、三宅 1928、朝永 1936 を紹介し、傾向が歴史的研究から体系的の研究へと移ってきたことを示す。Sebba 1964 にも採録。
- 野田又夫『デカルト』弘文堂 * (後述)
- 1939 昭和 14 吉満義彦「デカルト的思惟の限界」『カトリック研究』 7

-10号

E.ジルソンやJ.マリタンなどに準拠し、カトリックの立場に立って批判的に解釈する。

— 『デカルト選集』創元社*

『方法叙説』落合太郎訳、『精神指導の規則』野田又夫訳、『省察』三木清訳、『哲学の原理』佐藤信衛訳、『情念論』伊吹武彦訳、『真理の探究』森有正訳、『デカルト書簡集(上)』佐藤正彰・川口篤・渡邊一夫訳、『デカルト書簡集(下)』渡邊一夫・河盛好蔵・市原豊太訳。これは日本で最初のまとまった著作集で、1942昭和17年に完結した。ただし『省察』のみは昭和23年。本邦初訳となるものが多く、記念碑的な選集である。

1940 昭和15 三宅剛一「デカルトにおける延長」『學の形成と自然的世界』弘文堂

初出は1938昭和13年『哲學研究』第23巻・1で、Sebbaにも採録されている。

— 川田熊太郎『世界大思想家選集8、デカルト篇』第一書房
伝記と学説の紹介。翻訳したものを編集。300ページを超える。

— T.Kuwabara et M.Noda éd., *René Descartes Discours de la Méthode*. Librairie Hakusuisha (Collection Signes-Verts).

桑原武夫・野田又夫による『方法序説』の校訂本。ジルソンのテキストに基づく。

1943 昭和18 森有正『デカルトよりパスカルへ』日新書院

— ヴァレリー『ポオル・ヴァレリ全集』第9巻、吉満義彦訳、筑摩書房

「デカルト断片」、「オランダよりの帰り途」、「デカルト300年祭に臨みて」を収める。

1944 昭和19 九鬼周造『西洋近世哲学史稿・上』岩波書店*

講義録だがデカルトには50ページを費やしている。テキストに即した優れた解説である。

— アラン『デカルト』桑原武夫・野田又夫訳、筑摩書房

Alain, *Idées: Platon, Descartes, Hegel*. 1931のうち「デカルト」の章の翻訳。

— 西田幾多郎「デカルト哲学について」、『思想』265号、岩波書店
最晩年の西田の立場からのデカルト批判。懐疑はよいが、コギトの確立にいたって否定的自覚の道を外れているとする。

- 桂寿一『デカルト哲学研究』近藤書店＊
デカルトの哲学体系を分析しつつ、そこに理論と実践との対立をみる。
- 1947 昭和 22 野田又夫『近代精神素描』筑摩書房
「デカルト雑考」（昭和 9）、「デカルト閑談」（昭和 14）、「デカルトと近代科学」（昭和 15）、「デカルトと現代」（昭和 22）を含む。
- 澤瀉久敬『仏蘭西哲學研究』創元社
「デカルトの cogito ergo sum の哲學史的一考察」（『哲學研究』昭和 17、第 27 卷-10）を含む。
- 1948 昭和 23 桂寿一『デカルト哲学の発展』近藤書店
- 渡邊秀『デカルト 精神の自画像』夏目書店
- 森有正『デカルトの人間像』白日書院
- 新福敬二『省察』蒼樹社
- 1949 昭和 24 河野伊三郎訳『デカルトの幾何学』白水社
『幾何学』の本邦初訳として貴重である。
- 野田又夫編訳『デカルト、エリザベトへの手紙』（アテネ文庫）弘文堂
- アラン『哲学入門』上 吉田秀和訳、アルス
- 『サンス』第 6 冊「デカルト研究」創元社＊
高坂正顕「デカルトと実存」、野田又夫「デカルトにおける形而上学と自然学」、桂寿一「デカルト自然学の精神」、小堀憲「デカルトの幾何学」、佐野次郎「デカルトと医学」、前川貞次郎「デカルトと歴史」、竹内良知「デカルトとスピノザ」、近藤洋逸「デカルトとガリレイ」、今井仙一「デカルトとホップズ」、串田孫一「デカルトの系図」、森有正「デカルト思想の神秘主義的要素」、川口篤「17 世紀フランス哲学思想の潮流」、三宅徳嘉「デカルト年譜」。戦後の混乱期にありながら日本のデカルト研究の高い水準を示す論集である。
- 1950 昭和 25 『理想』201 号（死後 300 年記念）
長谷川克彦「社会人デカルト— その個人主義的社会観と生活態度について」、今泉三良「デカルト哲学の一断面 — 中世的なリアリズムから近代的なイデアリズム」、串田孫一「デカルトの背景」、関戸嘉光「デカルトの夢」、森有正「人間デカルト — 1619 年 11 月 10 日の「夢」を繞って」、近藤洋逸「デカルトと科学」。
- 『哲學雑誌』65-705 号

山本信「デカルトとライプニッツにおける合理主義」、今道友信「聖アウグスティヌスとデカルト」、桂寿一「コギト — 思想と近代合理主義」、串田孫一「RAISON について」、森有正「デカルトにおける知的啓示について — 方法叙説第一部末尾の解釈」、渡辺秀「神の存在の第三証明について」、河野伊三郎「デカルトの幾何学 — 数学史を背景として」。

- 澤瀉久敬『デカルト』（アテネ文庫）弘文堂
- 野田又夫『デカルトとその時代』弘文堂
「ルネ・デカルト — 近代合理主義成立の様相 —」、「唯物論と二元論 — ガッサンディとデカルト—」、「デカルトと王女エリザベト」、「デカルトにおける形而上学と自然学」など7編を収める。
- 野田又夫『デカルト 近世的思惟の出発点』有斐閣
- 滝沢克己『デカルト「省察録」研究』上 乾元社
- 森 有正『デカルト研究』東大協同組合出版部

2. 主たるデカルト研究

世にデカルト研究なるものは多いが、そのうちから明治、大正、昭和の代表的な研究書の三つを取り上げる。すなわち桑木巖翼『デカルト』明治 37、朝永三十郎『デカルト』大正 14、野田又夫『デカルト』昭和 12 である。

(1) 桑木巖翼『デカルト』富山房（1904 明治 37）

桑木は旧制一高、京都帝大、東京帝大で教壇に立ち、明治・大正期を代表する哲学者の一人である。カントおよび新カント派の影響の下に、ヴィンデルバンドなどの翻訳、哲学史、概説書などで広く哲学の啓蒙活動をした。『カントと現代の哲学』（1917 大正 6）は著名である。日本の哲学研究を外国に紹介するに功あった人でもある。桑木自身の立場は文化主義⁽¹⁰⁾である。『デカルト』は著者 30 才、東京帝大助教授時代のものである。

本書は全 306 ページあり、「序説」「伝記」「著書」の 3 篇からなる。「著書」（翻訳）が本体であり、「序説」と「伝記」はその前文のような位置づけである。それらは桑木自身も言うように、フィッシャー（K.

Fischer, *Geschichte der neuern Philosophie. I Descartes und seine Schule*)⁽¹¹⁾に依拠したものである。「序説」篇ではデカルトの思想が概説され、デカルトには矛盾などがあるが、その研究方法と態度（確実なる自己意識からの出発）に見るべきものがあるとする。とくに「反論と答弁」を概観したのちに、問題点として神と世界、精神と物質、人類と動物という二元論のもつ矛盾を挙げ、一元論に傾かざるを得ないとする。そして神と世界というデカルト的二元論 *Deus et Natura* よりも、スピノザの一元論 *Deus sive Natura* に優位を見ている⁽¹²⁾。しかし学説に欠点はあるにせよ、デカルトはそれらの問題に淵源する諸説を後に生ぜしめた。すなわちマルブランシュの偶因論、スピノザの一元論、ライプニッツの单子論、ロックの経験論、ラメトリーの唯物論、カントの批判哲学などである。この点でデカルトは近世哲学史上、重要な任務を果たした（この解釈はフィッシャーに従っている）と結論する。「著書」編は『方法論』（『方法序説』）と『考察録』（『省察』）の訳である。V.クザン版 1824 の『デカルト全集』第一巻によるとと思われるが、K.フィッシャーのドイツ語訳 1863 も参照できたはずである。

著者自ら言うように、これは短時日の内に書きあげたもので、多くの書物を踏まえた十分な批判的研究にはなっていない。ほぼフィッシャーの祖述であり、「デカルトの哲学は矛盾を以って斃れたり」（p.57）とするなどの教科書的解釈も、フィッシャーによるものと思われる。また学説の内容紹介を、せつかく翻訳された『方法序説』や『省察』からではなく「反論と答弁」から抽出しているのは理解に苦しむ（それもフィッシャーによるものか）。デカルトを近世哲学の先駆者と位置づけるのはよいのだが、とくに認識問題や方法的懐疑に注目しているのは新カント派らしい。この点で「ドイツの歴史的研究の影響は否めない」と自己評価している⁽¹³⁾。翻訳に関して言えば、『省察』がラテン語原文でなく仏訳を元にしてしているのは、現代の研究レベルからすれば物足りない。

しかしフランスではアダン・タヌリ全集はおろか、批判的解釈もまだ出てない 1904 年という時期に、これだけのモノグラフィーが日本で出たこと、また本邦初のデカルトの訳書が出たことは大きいと言わねばならない。明治維新からわずか 37 年で、これだけの基礎研究を世に出したことは尊敬に値する（もっとも「世界哲学文庫」シリーズはこれ一冊のみであったが）。泰西の思想を学び取ろうとする明治の意気込みの現わ

れであり、日本語で書かれた最初の啓蒙書として高く評価すべきであろう。また結果的にみれば、日本人は新カント派⁽¹⁴⁾などのドイツ系の哲学史書を経由してデカルトを知るに至ったことになろう。

(2) 朝永三十郎『デカート』岩波書店(1925 大正 14)

著者は『近世における「我」の自覚史』(1916 大正 5)で広く世に知られる。この自覚史にデカルトは登場するものの、部分的かつ哲学的記述にとどまる。朝永はドイツのヴィンデルバンドに学んだ哲学史家であるが、英仏の哲学にも明るい⁽¹⁵⁾。その立場はカントおよび新カント派の理想主義である。『デカート』は京都大学教授時代に書かれた書物であり、章立てやページ数からして研究講義の材料でもあったと思われる。

「生活及び著書」と「思想」との二部構成で全 406 ページからなる。処々にかなり専門的な脚注もつけられている。第一部は伝記が中心であり、デカルトを自己修養につとめる貴族的・保守的精神の持ち主として描いている。これも主としてフィッシャーによるが、パリやオランダでの生活に関しては「書簡」や『方法序説』を駆使した独自の解釈も含まれる。とくにオランダでの『世界論』の構想とガリレイ裁判による断念、『方法序説』の生成、オランダでの迫害などの記述は、現在でも資料的に十分通用するであろう。またスウェーデンのクリスティーナ女王を評して「勝氣一方にして而かもむら氣なる女王の性格舉止が、氣高くして優雅温良なるエリザベートに比してデカルトの趣味に適はざりし」(p.109)とあるのは、推察であるにせよ納得させるものがある。

第二部は思想の分析である。方法、形而上学、自然哲学、人性論、倫理説、総括と続く。「方法」の節では、デカルトが「学一般の方法の根本的考査」を行った点に重要性があったとした上で、『精神指導の規則』によってデカルトの方法が分析される。そして、認識の限界問題の提起や新数学による新方法の発見などは評価できるが、直観の議論にはカントに比して雑駁な点があるとする。「形而上学」に関しては、懐疑、コギト、神、誤謬、物体などの主題が解釈される。「自然哲学」の節では、物体、運動とその法則、微小粒子説などが取り上げられ、その歴史的意義が分析される。「人性論」は機械的身体論と『情念論』の分析である。そして心身二元論を唱えながら松果腺仮説を立てるのは「靈魂を物質的に表象しているので」矛盾であるとする(p.301)。「倫理説」はストア

的道德論の祖述であるが、快樂を行為の目的とするエピクロスを是認している点に矛盾があり、カントとも異なるとする。最後の「総括および補説」ではゲーリンクスなどのデカルト学派を論じ、スピノザにおいてデカルト哲学の展開が終着するとする。また体系期における認識論的契機として、形而上学の方法は一般から出発する総合ではなく、特殊的事実から出発する分析であり、カントの認識論とは少しく異なるなどの諸論点が補足される。

これは日本における最初の本格的なデカルト研究であろう。テキストはアダン・タヌリ版を使用しており、現代の批判にも耐える。デカルトを深く読んでおり、解釈も細かく透徹しているところが多い。桑木の評によれば、この書は「ナトルプの新カント派の解釈を導入している。とくに『規則論』の認識論にカントの先駆をみる。現代フランスの著作に影響されてデカルトの道徳をまとめている」⁽¹⁶⁾という。たしかにフィッシャーやナトルプによるところもあるが、独自の解釈と思われる点もある。たとえば、神の存在証明は「本具表象」による証明である、神の概念はわれわれの内なる神の活動と解される、「神思惟せらる」*Deus cogitatur*と「神存在す」*Deus est*とは直観によって直接結合される (p.214) などの指摘は興味深い。著者はカントの認識論を念頭に置く学者でありながらデカルト哲学に関心を寄せ、公平な目でデカルトの思想を分析している。哲学史家として厳しい自己制御の下でものを書くことを知っている人である。それはバランスのよい記述にも現れている。

ただ、参考文献はドイツのものが中心であり、フランスのものはミレー J.Millet を除いてほとんど参照されていない。この書が著された時期、伝記ではアダン Ch.Adam やコアン G.Cohen、体系的研究では新カント派のアヌカン A.Hannequin やアムラン O.Hamelin、その他ジルソン E.Gilson やグイエ H.Gouhier などの錚々たる研究書があった。それらが全く顧みられていないのは、時代や言語の制約があったとはいえ残念である。

(3) 野田又夫『デカルト』弘文堂 (1937 昭和 12)

野田はカントとドイツ観念論から出発し、デカルトやパスカルなどフランス哲学の研究に新境地を開いた人である。田辺元の弟子であるが九鬼周造や天野貞祐にも学び、西田幾多郎とも師弟関係にあった。この書

が書かれたのは著者 27 才、旧制大阪高等学校の教壇に立っていた時代である。

全六章 324 ページからなり、全編を通して伝記と学説の記述とが密接な連関を保っている。第一章「修行時代」は、学院を出てからの遍歴時代の伝記であり、そこには「知恵」の実現という目標があったものの、結局は外の世間の否定という懐疑の道をとったことを指摘する。第二章「方法」は、『規則論』と『方法序説』による方法の分析であり、分析と総合、普遍数学、方法の手続き、直観と演繹などが論じられる。そして形而上学の手続きは、方法的懐疑という自己否定的分析になっているとする（この点に著者の立場はすでに現れている）。第三章「和蘭」は、『方法序説および三試論』の概要と『省察』出版の状況を記述する。とくに「精神を身体（感覚）から切り離す」という点に重要性があることを示唆する。第四章「形而上学」は、デカルト形而上学の骨子を述べたもので、最も多くのページが割かれている。精神・神・世界の三つの問題が「懐疑による自覚」において内面的に統一されている（p.131）という基本的な見方をまず示す。その上で、懐疑は単なる否定判断でも自由な想像でもなく、意志的な決定による。コギトは自覚的精神の独立存在を言い、自覚的精神の根底においてすでに神の誠実があるので（この点にユニークな解釈¹⁷⁾がある）、精神の実体化を批判することも循環を指摘することも当たらない、とする。また人間における自発性の自由も神の存在証明も、要するに懐疑による我の自覚に基づいている。さらに、心身合一（感覚的世界）は心身の区別（理論的な分析）と矛盾はしても、神の誠実を根拠とする精神の自覚によって生の場面で肯定されている、とする（この点にも独自の主張がある）。第五章「自然学体系」では、主として『哲学原理』によってデカルトの自然学の要点が、連続量としての空間、運動の原因と運動の三法則、宇宙生成論、をめぐって分析される。第六章「デカルト・モラリスト」では、まず心身問題に関するエリザベトとのやりとりが紹介され、心身合一が理解されるのは「生」の場面においてであることが再度示される。次に『情念論』の分析がなされ、心身の相互作用を司るものとしての松果腺は「窮策」などではなく、それは自然学的な分析の結果として「外延化しえない内包的身体として残るもの、それ故にまた理性意志の行為の実現の可能を保証するもの」（p.268）としている。そして、書簡や『情念論』によって道徳を論じて

「高邁」の徳に及び、哲学者の生き方の「知恵」を示す。最後にオランダでの迫害とスウェーデンでの客死に触れる。

評価に関しては、なによりも著者自身による自己評価がある。すなわち「この本の中で解釈上特に問題とした点」は二つある。第一に、精神、神、世界の確証において疑いがはたらいており、疑いがすべての基礎にあるとした点である。そこでデカルトの形而上学の第一原理は、自己の存在だけでなく、神の存在と世界の存在を含めて三つあることになる。第二に、心身問題については「心身合一を、知性とは独立な次元としての感覚的生のあり方として積極的に肯定し、これを基礎として情念や感覚の分析に向かっており、…現代哲学の身体論に近い考えを示していると認めうる」ことである⁽¹⁸⁾。これに尽きているのであるが、蛇足を付すならば、(1) 懐疑を思想の原点とし、意志を強調するのはアランの解釈である。(2) 「自覚」「否定による媒介」などは西田の弁証法の影響と思われる。野田はのちにそれを棄てることになる。(3) 哲学史的にみた発展史的な解釈ではなく、デカルト哲学の精神の内部からする体系的な解釈である。その特徴として、コギトに神の誠実を読み込むこと、心身関係は理論的・形式的には矛盾であるが生の場面で肯定されるとすること、が挙げられよう。(4) 文献に関しては、フィッシャーなどの哲学史よりもフランスの最新の研究が多用されており、見識の高さや解釈の精度の高さも同世代のグイエと並ぶものと言ってよいであろう。

3. 総括

以上のことから日本におけるデカルト哲学の受容について、何が明らかになるであろうか。それぞれのデカルト研究の時代的背景と、その受容が日本の哲学に与えた影響をまとめておきたい。

(1) 明治期のデカルト研究とその背景

デカルトの名は幕末の頃から、何らかの西洋の書物を元に、古来の風を破る近代の実学ないし哲学の祖の一人として触れられている。明治になってからは、おそらく西周が最初にデカルトに言及し、高田早苗、吉田五十穂、井上哲次郎などと続く。ただ、それらは単なる言及であって

思想の紹介とは言えない。その後、クザン、ボーエン、フイエなどの訳でデカルト哲学の概要がはじめて明らかにされた。さらにドイツの哲学史書（シュヴェーグラー、エルドマン、フィッシャー、ヴィンデルバンド）を手本とする概説や哲学史のなかで、デカルトは多くのページを割かれることになった。井上円了、三宅雄二郎、清沢満之、大西祝、中島力造、波多野精一らの書がそれである。明治21年ごろ、まだ十代の西田幾多郎がデカルトの名を私信に記しているのは、そうした情報源の一つによるものであろう（西田がデカルトを論じるにいたるには、明治44年の『善の研究』を待たねばならない）。いずれにせよ日本のデカルト研究の特徴の一つは、その出発点からしてドイツ系の歴史的研究の大きな影響の下にあったことである。

では、なぜ、どういう背景の下にデカルトが紹介されたか。その理由は、新興の日本は泰西の文化・文明に学ぶ必要があり、それを深く理解するには哲学が必要である。哲学を知るには、旧習を脱して近代哲学の最初の種を蒔いたデカルトやベーコンをまず学ぶべし。こういう認識があったからと思われる。かくして明治の哲学者たちの多くがデカルトに言及した。だが実は心ここにあらずであった。というのも、それぞれ自らのヴェクトルがあったからである。西周はコント、中江兆民はルソー、井上哲次郎は東西哲学の融合、大西祝はカント、井上円了は仏教哲学、清沢満之はヘーゲルと仏教に向かっていた。また中島力造はグリーン倫理学、波多野精一はキリスト教への志向性があり、『デカルト』を書いた桑木厳翼も、その心はカントと新カント派に向かっていた。要するにデカルトは、哲学史研究の一環ないしは出発点として学ばれる程度であり、デカルト哲学を自分の思想の中心に据える人や、それを規範としてものを考えようとする人はいなかった。この点で、デカルト研究は、明治の時点でカント研究などに比べて大きく立ち遅れていた。

およそ明治期の思想において（それ以降においてもそうであるが）、デカルト主義が主流をなすことはなかった。周知のように、西洋思想の移入の主流は、まずベンサム、ミルの功利主義、コントの実証主義にはじまり、ついでルソーの民権論、スペンサーの進化論であった。少し遅れてカント、ヘーゲルなどのドイツ哲学がアカデミズムの主流となった。デカルトは小説に引用されるほど知名度は高かったが、時代の思想的中枢には遂になりえなかった。デカルト哲学は国家社会をあまり論じるこ

とをしないが、そのためかそれは日本の新国家運営の指針とはなりえず、明治政府はデカルトに用がなかったとさえ言える。

ただ、この時代のデカルト研究の背景には精神的なものがあつたと思われる。たとえば中江兆民は、カントやデカルトなどの哲学を有することは実際面での有用性よりも国の「品位」に関わる問題だと考えた。また、まさに日露の開戦時に『デカルト』を出版した桑木は、デカルトが「過渡期より出でて将に新氣運を作らんとするものにして、我國現代に照し頗る適切なるもの」(p.3)と述べたうえで、難局に対処するためにも「北欧の冬營に蟄居して陣中よく哲學革新の瞑想に耽れる哲人の業」(p.6)を思うべしとした。桑木は、デカルト哲学は実用からは遠いものだが新生日本を導くものであり、戦乱にあつて真摯に哲学するその精神に多くを学ぶうると考えているのである。

(2) 大正・昭和戦後のデカルト研究とその背景

大正期以降のデカルト研究については、桑木 1937 も指摘するように、哲学史的研究から次第にデカルト哲学の体系的な研究へと重心が移っていることに特徴があるであろう。実際、翻訳などのテキスト研究や伝記的研究が進むにしたがつて、ことばや解釈の精度が高まり、学説の理論的・体系的な把握も緻密になってきている。

大正のデカルト文献としては、出隆の訳業と朝永三十郎の研究が大きな収穫であろう。出の訳(1919 大正 8)はラテン語およびフランス語原典からの厳密な訳であり、今日でも学問的な意味がある。朝永は桑木の研究書と出の訳を踏まえながら、大正 7 年ごろからデカルト研究に着手し、数編の堅実な論考⁽¹⁹⁾を発表している。『デカート』(1925 大正 14)はその成果であろう。これら二文献によって、日本のデカルト研究の基礎が形成されたと言えるであろう。

桑木も言うように、朝永の研究の背景にはドイツ系の歴史的研究の影響がなお残っている。だがそれだけではなく、いわゆる大正デモクラシーの影響があつたと考えられる。『私の自覚史』の朝永は、桑木とともに大正デモクラシーの一翼を担う「黎明会」のメンバーであつたし、出隆はデカルト翻訳の 3 年後に『哲學以前』⁽²⁰⁾(1922 大正 11)において青年の魂の遍歴と自我の確立を問い、多くの読者を得ることになる。自我の確立や人格哲学や教養主義が叫ばれたこの時期、偉大な思想家を厳

肅な学問的手続きによって正確に理解することが、みずからの人格や見識を高めることになるという意識があった⁽²¹⁾。朝永や出の学問的に厳密な研究姿勢の背後には、一人の哲学者を正確にかつ深く理解すること自体に価値があるとの信念が見える。かれらのデカルト研究は、そうした精神の産物でもあったであろう。

昭和に入ると、学問的に厳密な姿勢を維持しながらも自由で独自の背景をもつ研究が数多く出はじめる。明治・大正の一般研究がここに来て特殊化・分節化されるようになったと言えようか。たとえばカトリックの立場に立つ吉満義彦、一貫して自然哲学を問題にする三宅剛一などはその一例である⁽²²⁾。だが最大の成果は野田又夫『デカルト』（1937 昭和 12）であろう。これはデカルト哲学そのものを思想の座標軸に据える点で、これまでにない独自の研究である。野田の解釈の背景にはドイツ哲学があり、西田幾多郎の弁証法の考え方があった。だがそれにとどまるものではないだろう。のちに野田は「わたしなんかもアランやデカルトにささえられたというか、戦争に耐えるのには役に立ちましたね」⁽²³⁾と述懐している。デカルトの学問と生への態度決定に学びながら、満州事変にはじまる戦時に自らどう対処して生きるかという隠れた問題意識⁽²⁴⁾が著者の背景にあったかと推察される。

昭和 14 年の『デカルト選集』⁽²⁵⁾は基礎資料として大きな意味をもつ。昭和 19 年の九鬼周造の講義録は秀逸であり、広い影響を与えた。戦中にも研究は続けられており、戦後において出版点数が急に多くなるのはその表れでもあろう。戦後の自由の時代を背景に、その内容は多様である。澤瀉久敬はベルクソンをはじめとするフランス哲学全体の視野に立ち、桂寿一は哲学史的発展を見る。森有正や渡辺秀はキリスト教に立ち、河野伊三郎や小堀憲は数学史の、近藤洋逸は科学史の視点をもつ。その他に、唯物論に立つ研究も出てきている。昭和 24 年の『サンス』は、日本のデカルト研究の水準の高さを示す一つの里程標をなすものだろう。

（3）デカルト哲学の受容が与えた影響

日本におけるデカルト研究が、先人たちの研究の上に成立していることは言うまでもない。桑木 1904 があるのは、井上哲次郎ら明治の先覚者たちによるデカルト紹介があつてのことである。朝永 1925 は「原文の解釈、訳法其他に於いて」桑木と出 1919 とを踏まえている⁽²⁶⁾。野田 1937

は朝永に多くを教わるところがあり⁽²⁷⁾、現在のデカルト研究は野田に負うところが大きい。このようにデカルト研究の連綿たる系譜は明瞭に見て取れる。

だが、歴史的に見れば日本人の好みはスピノザ、カント、ヘーゲルに集中しており、とくにデカルトを受容しなくても不都合はなかったようにも見える。それに、デカルト哲学の受容が日本の哲学研究に何らかの影響を与えたかどうかを特定することは難しい。なぜなら、先述したように明治以降の日本の思想家や学者で、デカルト主義に立つ人はほとんどいないからである。福沢諭吉や内村鑑三にはデカルトへの関心は見られないし、デカルトを紹介した中江兆民も先述したようにルソーを好んだ。夏目漱石や西田幾多郎はデカルトに少し関心を寄せたものの批判的であった。鈴木大拙は仏教が、波多野精一はキリスト教とスピノザが興味の中心であった。九鬼周造は別としても、阿部次郎や和辻哲郎はとくにデカルトに関心を示していない。三木清はパスカルを取り上げるが、デカルト研究の痕跡は見当たらない。田辺元は最新のデカルト文献に目を通してはいるが、自らの立場はデカルトと相容れないものであった。デカルトをわが事としたのは野田又夫くらいであったろうか。

しかし、直接の影響ではないにせよデカルト哲学の受容が日本の哲学研究に及ぼした影響のいくつかを指摘することはできる。まず第一に、桑木が指摘したように「哲学の方法と態度」として、自己意識から出発することである。意識や自我に着眼する哲学の仕方は、西田の「意識経験」の立場や、朝永の『私の自覚史』などにも影響があったと考えられる。漱石の「意識現象」⁽²⁸⁾や「自己本位」⁽²⁹⁾も、あるいはその延長線上に来るものかもしれない。現代日本の現象学もまた、自己意識から出発するデカルトの考え方（それはフッサールの考え方でもあるが）を基本的に受け継いでいるといえよう。第二に、野田が示すような懐疑の精神である。仏教には周知のように「大疑は大悟の基」という考え方があり、日本にはデカルト的懐疑は受け容れられやすい風土がある。西田も哲学の方法としての「懐疑による自覚」や「徹底的な否定的分析」を高く評価している⁽³⁰⁾。若き西田がそうであったように、それは素朴な形において明治・大正の青年たちの人生への煩悶⁽³¹⁾と呼応するところがあったであろう。またそれは思考方法において、ものごとをいったん疑う（否定する）ことによってより大きな肯定を得るとする、弁証法的論理の考え

方に通低するであろう。第三に、明晰さ *clarté*⁽³²⁾ という問題意識の発生と定着である。デカルト哲学には明晰さへの厳格な要求があり、論理の知的な鋭さがある。概念的な思考よりも具体的事象や直観の明証性に訴える場面が多い。そこには基本的に、ことばや思想の単純明快さを求める精神がある。これはベルクソンについても言えるフランス的精神の基本であろう。この精神は九鬼や澤瀉によって日本に広められ、それまでの新カント派の哲学一辺倒から、現象学やフランス哲学へと目を向けさせるのに役だった。この意味でデカルト的な明晰さは、日本人の哲学的関心を広げ、今も哲学研究的方法的な基盤をなしていると言える。第四に、デカルト哲学の受容がおのずから科学研究に結びつくことである⁽³³⁾。『方法序説及び三試論』『哲学原理』『情念論』において明らかなように、その哲学は、数学、生理学、物理学などの自然科学との密接な関係において語られている。三宅剛一や近藤洋逸の指摘を待つまでもなく、それは科学との関わりにおいて哲学することの意味を教えており、現代の科学哲学や科学史研究はその延長線上に来るものと位置づけられる。

以上のように、デカルト哲学の受容は日本の哲学研究に多様な影響を与えている。デカルトは英米やドイツの哲学とはタッチが異なるし、同じフランスのベルクソンともまた違う。もしその哲学が日本に導入されなかったとすれば、日本における西洋哲学の理解は浅く、概念的で狭いものになっていたであろう。もとよりかれの哲学の評価は毀誉褒貶相半ばする。だが明治以来のデカルト哲学の受容は、デカルトが単に実学の祖にとどまらず、日本の哲学研究の重要な源泉の一つをなしていることを物語っていると思われる⁽³⁴⁾。

注

- (1) 『イエズス会日本コレジヨの講義要綱』*Compendium catholicae veritatis*.1595 (上智大学キリシタン文庫監修・編集 1997)。拙論「イエズス会「学事規定」とデカルト」(『創文』486号.2006.p.2)を参照。
- (2) 館長リチャード・コックスの日記による。麻生義輝『近世日本哲学史』p.17
- (3) 通称「西洋學師之説」。哲学者は「學師」と訳され、「カルテシウス」ということばも使われている。
- (4) 本稿は 1950 (昭和 25) 年以前の文献に限定した。1951 年以降の日本の文献

については次の二つのものがある。K.Murakami, T.Nishimura et M.Sasaki, *Bibliographie chronologique des publications en langue japonaise sur Descartes et le cartésianisme 1951-1979*, in *Analectica Cartesiana* 1, Supplement aux *Studia Cartesiana*. Amsterdam 1981. 小沢明也「日本におけるデカルトに関する文献 (1979-94)」『デカルト研究会編『現代デカルト論集Ⅲ・日本編』勁草書房 1996。世界のデカルト研究を網羅した G.Sebba, *Bibliographia Cartesiana: A Critical Guide to the Descartes Literature 1800-1960*. The Hague 1964 には、日本人の研究が少なくとも 6 点載っている (桑木徹翼、野田又夫、三宅剛一、沢田允茂、近藤洋逸、所雄章)。最近の文献を収録したものは、J.-R.Armogathe, V.Carraud, *Bibliographie cartésienne (1960-1996)*. Lece : Conte. 2003 があり、多くの日本人の研究が紹介されている。

- (5) 井上哲次郎 (1855-1944) は東京帝国大学哲学科の第一回卒業生。ドイツで N. ハルトマンや K. フィッシャーに学んだのち明治 23 年より哲学科教授。当時の外人教師としては、モース、フェノロサ、クーパーに代わって、明治 20 年ブッセ、26 年ケーベルが来日していた。井上を軸に当時の帝大哲学科の出身者を見るに、中島力造 (1857-1918) は倫理学の同僚である。井上円了 (1858-1919) は哲学館 (東洋大学) を設立した。三宅雪嶺 (1860-1945) は評論家。少しおかれて宗教家の清沢満之 (1863-1903)、東京専門学校の大西祝 (1864-1900) がいる。さらに、西田幾多郎 (1870-1945)、高山樗牛 (1871-1902)、朝永三十郎 (1871-1951)、桑木徹翼 (1874-1946)、波多野精一 (1877-1950) と続く。
- (6) この書は西周がオランダからの帰路、買い求めた本でもある (麻生義輝『近世日本哲学史』 p.126)。
- (7) 同じ批判は漱石にも見出される。「歐洲基督教徒の研究した哲學は必ず神と云う字が出て来る。我々日本人が考へると何も神と云ふ事と哲學的思想とは關係のない者である。神は神、哲學は哲學でよからう様に考へられるが、彼等は基督教徒であつて、生まれ落ちた時から死ぬ時迄、基督教のお蔭を受けて居る。而して基督教の根據は神であつて此神から人間も天地も出來て居るのだからして、哲學者の様に物を考へる人の自然の傾向は此神を今迄通り認識するか、又は今迄の神と云ふ觀念を變形して之を受納するか、若くは全然此神なるものを打崩すか。どうか神の始末をつけねばならぬ。従つて歐洲の哲學者は神のことを云々せざるを得ない。我々日本人は違ふ。根本的にそんな影響を蒙つて居らんから神杯をどんなものだと考へる必要もない。西洋の哲學書にある神などの受賣をする必要はない」(夏目漱石『文學評論』、『漱石全集』第 19 卷 p.53)。これは西洋哲学の神

を斜めに見ての発言だが、「神」の意味が問題であろう。哲学者が考える神は万物の根本原理であって、必ずしもキリスト教の神である必要はない。東洋的な天としてもよいはずである。

- (8) J.E.Erdmann, *Versuch einer wissenschaftlichen Darstellung der Geschichte der neuern Philosophie*.3 Bde.1834-53
- (9) 以上に共通する批判点は、心身の相互関係が説明できない、二元論の克服に神を援用している、循環論になっている、心身を第二の実体とすることの不整合、などであろう。これらは今も問題である続けている。
- (10) 「(大正末期に日本で用い始めた語)文化の向上・発達、文化価値の実現を人間生活の至高目的とする立場。文化の発達程度をもって社会生活を評価する究極の規準とする立場。文化至上主義。」(『広辞苑』)
- (11) この書はフィッシャーの要約本と思われる。Sebba にはその英訳書の記述がある (*Descartes and his school*.transl.from the third German edition by J.P.Gordy,edited by Noah Porter. New York, Scribner,1887.vvi.589p. (Fischers' History of philosophy)。原本はむろん K.Fischer, *Geschichte der neuern Philosophie.1 Descartes' Leben,Werke und Lehre*.1852 である。これは内容的には、ドイツ語による最も包括的な研究であり、伝記の部分は古いがヘーゲルの有名なデカルト解釈を反映している、と Sebba は評している。
- (12) 西田幾多郎もデカルトについて同じ見方をしている。「デカルト哲学について」『西田幾多郎全集』第 11 卷 p.160。
- (13) 桑木 1937.p.136
- (14) この時期、同じ新カント派の立場からフランスのアヌカンが、デカルト論を含む哲学史を出している。A.Hannequin,*Etudes d'histoire des sciences et l'histoire de philosophie*.1908
- (15) 『第十九世紀の佛國哲學』(昭和 4)、「ルネッサンス及び先カントの哲學」(昭和 24)
- (16) 桑木 1937、p.137
- (17) この解釈はミロー (G.Milhaud,*Descartes savant*.1921) から触発されたと言う (『野田又夫著作集 1』p.688)。
- (18) 『野田又夫著作集 1』白水社 1981「あとがき」p.690
- (19) 「デカートの「規則論」に現はれたる批判論的思考」(『哲學研究』第 2 卷・10,11、大正 6)、「デカートの「規則論」に於ける「直覚」(同、第 4 卷・8、大正 8)、「デカートの倫理思想とカントの倫理説」(同、第 5 卷・3、大正 9)、「デカルト哲學

- に関する二三の考察」(同、第8巻・3、大正12)。朝永は同じく堅実な考察の下に、『デカルト・省察録』(昭和11)を出すことになる。
- (20)この書において「デカルト」は哲学史の知識として教箇所登場するにとどまる。
- (21)この意識はとくに旧制高校における哲学教育によって高められ、大正教養主義を形成したといえよう。なお大正から昭和の初めにかけて、『世界大思想全集』(春秋社)など東西の思想家の伝記が多く出版されている。
- (22)1932昭和7年、肥下恒夫、伊藤静雄、保田与重郎らによって文芸同人誌『コギト』が創刊されたが、その題はデカルトの「コギト・エルゴ・スム」に由来する。文学の分野への影響と言える。
- (23)『世界の名著・デカルト』(中央公論社1967)付録、大岡昇平との対談「デカルトの考え方」p.2
- (24)戦後まもなくの昭和25年、野田が京都平和問題談話会のメンバーに名を連ねたのは、リベラルな問題意識と無関係ではないだろう。
- (25)これについて評論家の小林秀雄が、同年「デカルト讃」(原題「自我と方法と懐疑」)と題する短い文章を書いている(『小林秀雄全集』(新潮社1968)第3巻pp.313-314)。これはデカルトが日本文化のなかで咀嚼されはじめたことを示すものであろう。なお小林は1932昭和7年にヴァレリー『テスト氏』の翻訳や評論などをし、デカルトの精神を間接的に紹介している。また1964昭和39年には「常識について」(同全集、第9巻pp.316-350)でデカルトを論じている。
- (26)朝永三十郎『デカート』p.4
- (27)野田又夫『デカルト』p.2
- (28)『文藝の哲學的基礎』(明治40年)
- (29)『私の個人主義』(大正3年)
- (30)「デカルト哲學について」『西田幾多郎全集』第11巻pp.151-152
- (31)高山樗牛「人生終に如何」『二高文学会雑誌』(明治24年)、阿部次郎『三太郎の日記』(大正3年)、出隆『哲學以前』(大正11年)などに、その一端を読み取ることができる。
- (32)これは澤瀉久敏がフランス哲学の特徴の一つとして示したものである(『仏蘭西哲學研究』pp.329-358)。
- (33)ベルクソンはフランス哲学の特徴として「形式の單純性」と「実証科学との緊密な結びつき」との二点を挙げている(La philosophie française, in H. Bergson, *Mélanges*. 1972 pp.1183-84.)
- (34)本稿は学習院大学・人文科学研究所の共同プロジェクト研究『明治期以降に

おけるフランス哲学の受容に関する研究』(代表、杉山直樹助教授)の一環として準備されたものである。2005年12月23日の研究会では、酒井潔教授、杉山助教授ほか参加者の方々から有益なご示唆をいただいた。記して感謝したい。

(参考文献)

近代デジタルライブラリー<http://kindai.ndl.go.jp/index.html>(国会図書館)、『西周全集』1(宗高書房1960)、朝永三十郎『近世における私の自覚史』(角川文庫1966)、『日本思想大系』55(岩波書店1971)、『日本近代思想大系』10(岩波書店1988)、『井上哲次郎集』(クレス出版2003)、『大西祝全集』(日本図書センター2001)、『福沢諭吉全集』(岩波書店1958)、『中江兆民全集』(岩波書店1986)、中江兆民『一年有半・続一年有半』(岩波文庫1995)、『波多野精一全集』(岩波書店1969)、『井上円了選集』(東洋大学編1987)、『西田幾多郎全集』(岩波書店1966)、野田又夫編『世界の名著・デカルト』(中央公論社1967)、『野田又夫著作集』1(白水社1981)、『吉満義彦全集』(講談社1984)、『九鬼周造全集』(岩波書店1991)、『清沢満之全集』(大谷大学編2003)、『出隆著作集』(勁草書房1963)、『小林秀雄全集』(新潮社1968)、麻生義輝『近世日本哲学史』(宗高書房1942)、桑木徹翼『明治の哲学界』(中央公論社1943)、船山信一『明治哲学史研究』(ミネルヴァ書房1959)、宮川透『近代日本の哲学』(有斐閣1961)、宮川透・荒川幾雄『日本近代哲学史』(有斐閣1976)、渡辺和靖『明治思想史』(ぺりかん社1978)、藤田正勝編『日本近代思想を学ぶ人のために』(世界思想社1997)、高坂正顕『明治思想史』(燈影舎1999、理想社1969)、坂部恵・藤田正勝・鷺田清一編『九鬼周造の世界』(ミネルヴァ書房2002)

順不同